

特定非営利活動法人日本癌病態治療研究会 理事長  
 千葉大学 大学院医学研究院長・医学部長  
 千葉大学 大学院医学研究院 先端応用外科 教授

## 松原 久裕

今回もあっという間に巻頭言を書く時期となりました。前号から1年ですが、依然コロナは収束せず、大変多くの感染者を出した第6波がようやく落ち着き始めた状況です。第5波は急速に減衰しましたが、第6波は対照的に徐々に減少、第7波が実際はかぶっているのか、踊り場状態の状況を見せつつ、明らかな減少傾向を見せるようになりました。3年ぶりの緊急事態宣言などが発出されないゴールデンウィークを迎え、各地はにぎわいを見せ、交通手段も混雑、渋滞を呈する様になり、ようやくコロナ禍からの脱出を迎える気配が感じられるようになりました。

本研究会は群馬大学の調憲教授に当番世話人を担当していただいた第29回は残念ながら誌上開催、柴田昌彦副理事長が担当された昨年の第30回がWEB配信での開催となりました。現地参加可能な演者・司会者のみが配信会場の鎌倉プリンスホテルに参集しました。配信による開催でありましたが柴田先生のご尽力により充実した内容の研究會となりました。ありがとうございます。私も会場へ参りましたが、鎌倉プリンスホテルは大変素晴らしい立地、施設で鎌倉の良さを大いに味わわせていただき



した。このコロナ禍での2回の両当番世話人の調先生、柴田先生には大変なご面倒をおかけしており、その中での開催を心より感謝申し上げます。

今年の第31回は徳島大学の島田光生教授に当番世話人をお願いしておりますが、徳島での現地開催を目指し準備されておりました。しかしながら、このような状況下ハイブリッド開催となりました。面倒であり落ち着かない準備となり、島田先生始め教室の皆様大変申し訳なく思っております。ただ、現地での開催が望めそうな状況でもあり、島田先生からも皆様へ現地参加のお願いをされており、本研究会の一番の醍醐味である対面での熱い討論がくり上げられることを期待しております。皆様の参加をお願い申し上げます。

私自身に関しては昨年の第121回日本外科学会定期学術集會では外科系の皆様大変お世話になりました。繰り返しとはなりますが厚く御礼申し上げます。今年の第122回は熊本において馬場秀夫会頭が主催されました。こちらも現地開催を模索してこられました。上級演題のみの現地開催となりました。ただ私の時は第1会場のみが配信会場でありましたが、10-13会場においてシンポジウム、特別企画などが現地



鎌倉にて





熊本にて



熊本地震



で繰り広げられ、馬場会頭の目指したテーマ、企画の下に大変素晴らしい学会となっております。このような状況下では大成功の学会であり、馬場教授を始め教室の先生方のご苦勞を含め、心からお慶び申し上げます。短い時間でありましたが学会のみならず熊本の町、阿蘇なども楽しむことができました。一方で南阿蘇町の熊本地震による橋の落下現場が保存されており、その惨状を思い起こす現場を目の当たりにすると、小説での出来事のような事象が9.11テロ、東日本大震災、ロシアの侵略戦争など紙面の都合で書き切れないほど、実際に次々といろいろ起こっていると改めて実感いたしました。

このような状況下、なかなか本研究会を発展させるのは難しいのですが、何とか活性化するよう頑張っております。『Annals of Cancer Research and Therapy』をさらに発展させるためPubMedへの掲載を目指しておりましたが、本研究会の厳しい財政状況下での実施が困難でありました。そのため皆様からの寄付を募り、多大なご支援をいただきました。心より感謝申し上げます。しかしながら、最終的に現時点では掲載への条件をクリアするのが難しいと判断し、今回は見送り、万全を期してから応募することといたしました。その一方で、今年で副理事長を引退される柴田昌彦前編集委員長から、新委員長を新進気鋭の高知大学外科の前田広道先生にお願いしました。前田委員長からは、素晴らしい雑誌とすべく新しいアイデアをいろいろと出させていただいております。厳しい財政状況の

ため、すべてを実施できてないところが大変歯がゆいところではありますが、さらなる発展が大変期待されます。ぜひとも皆様からの多数の投稿をいただき、少しでも早くPubMedへの掲載を申請できる状況にもって行きたいと考えております。ご支援の程よろしく御願ひ申し上げます。

一方、この『W Waves』という邦文誌ですが、ありがたいことに多くの企業から協賛を受けております。協賛各社に心より御礼申し上げます。経費削減のため本誌の電子化も検討しましたが、電子化による広告費減少も考慮され、最終的にそれほど大きな収支改善に寄与しないと判断し、冊子体の作成を継続することにしております。状況に応じ、適切に判断していきたいと考えております。

今年は役員改選の年となります。先ほど、英文誌のところで述べましたが、柴田昌彦副理事長が理事終了となります。竹之下誠一前理事長時代から本研究会をいろいろな側面から支えていただきました。私自身も理事長に就任してから、多々ご教示いただき難局を一緒に凌いできました。多大なご尽力をいただいたことに心より感謝申し上げます。ありがとうございます。支えていただいた重要な戦力を失うのは本研究会にとって非常に痛いのですが、今後も本研究会にご参加いただきご指導賜ることを切に希望しております。

総会後に、新たな役員で再始動いたします。ぜひとも皆様からご支援いただき、1歩ずつ発展させていきたいと考えております。ご支援の程、何卒よろしく御願ひ申し上げます。